

地黄煎町



今回は薬とは関係のない昔話をひとつ(漢方薬とは少し関連性あり)。なお、本ニュースにおける地名、町名、施設名ならびに人名は過去から現在において、すべて実在したものです。

1) 地黄煎町とは

結論からいうと「**じおうせんまち**」と呼ばれた石川県金沢市にあった旧町名になります。私自身は大阪府池田市の生まれですが、父が金沢に2度転勤となったため幼稚園から大学院までを金沢の学校で過ごしました。ただし小学校の中間の約5年半は兵庫県尼崎市立塚口小学校で過ごしたので小学校での金沢生活はほぼありません。私が高校3年、弟が高校1年の時に、父は関西に転勤になりましたが、弟が高校卒業するまでは父が単身赴任することになり、それまで暮らしていた小立野にあった社宅を出て、兄弟が通うそれぞれの高校に近い円光寺に転居しました。そのため大学に入った当初は円光寺から金沢駅行きのバスに乗り香林坊で降りて、当時は金沢城跡地にあった金沢大学の教養部に通っていました。

当時の金沢大学はお城の中にある日本で唯一の大学として全国的に有名で、それに憧れて金沢大学を志望する学生も多かったと聞きます(地元の私にとっては単なる近くの大学でしたが)。

そのバス路線の途中で「次は、**じおうせんまち**」というアナウンスが必ず聞こえてきました。変わった町の名前だと思って、車窓の外にあるバス停の名前を見ると「**地黄煎町**」と書いてありました。やがて、ふつうに聞く、ふつうに見る風景になっていき特に気にもかけないようになりました。大学3年目(3年生ではない)になると、弟は高校を卒業して関東の大学へ進学し、母は父がいる関西へ戻り、そして私は金沢に一人とり残されるはめになりました。自宅で気楽に過ごしていたかった私は**仕方なく**下宿生活を余儀なくされ桜町にある4帖半の部屋が6室ある下宿屋に移ったため、地黄煎町のバス停を通る事も無くなり、その名前はすっかり忘れてしまいました。大学時代に生薬学や薬用植物学の授業があり「地黄」も出てきたはずでしたが、バス停の名前と関連付けした記憶は全くありません。

数年後、富山県の富山医科薬科大学(現、富山大学)附属病院の薬剤部に入職して何年か経ってから和漢調剤室で仕事をしている時に、当時の和漢診療部長の寺澤捷年先生から「入院患者に生の**地黄**を使いたいから、薬草園に行ってそれを持ってきて煎じ薬の処方追加して欲しい。薬草園には話をつけてあるから」という依頼がありました。地黄というのはゴマノハグサ科アカヤジオウ等の根で**補血**作用と**清熱**作用があるので有名な生薬です。血を補うところから強壯作用もあるとされています。その時に初めて大学の薬草園にお邪魔しましたが、担当の職員が「けさ採り立てのジオウド」と言って、その根をきれいに洗ったものを数本用意してくれていました。その色合いはホワイトアスパラガスか?と思った記憶があります。乾燥した調剤用の黒っぽい地黄しか知らなかったのが意外な思いを感じながら調剤室に持って帰りました。何の煎じ薬に加えたかは全く覚えていませんが、他の生薬は乾燥物なので指定された量を包丁で刻んで小さなビニールの小袋に入れて、いわゆる「別包」にして冷蔵庫保管し、煎じる際に他の生薬と一緒にして煎じて病棟に供しました。

当時は病棟業務がなかった時代で、その処方をされた患者さんがどうなったかは全く記憶に残っていませんが、私が担当した範囲内では生地黄を使ったのはそれが最初で最後だったような気がします。

地黄は処理のしかた(**修治**; しゅうち)の違いで3種類があり、生のものを**生地黄**(ショウジオウ)、そ

れを乾燥させたものを**乾地黄**(カンジオウ。一般に市販されているもので単に地黄ともいいます)、そして乾燥させてから蒸したものを**熟地黄**(ジュクジオウ。これも市販されています)といえます。後日、寺澤先生に教えてもらったそれぞれの特徴が右表になります。

生に近いほど清熱作用(熱を冷ます作用)が強く、蒸すほどに補血作用(血を補う作用)が強くなるという具合です。

こうした話を聞いているうちに何故か金沢のバス停の地黄煎町のことを思い出し、あの町は昔から地黄の産地で、その煎じたものを販売していたのだろうかという疑問をもったものの当時を懐かしむ程度で深掘りはしませんでした。そして何の脈絡もないまま、今再び「地黄煎町」を思い出しネット検索を試してみました。

	清熱作用	補血作用
生地黄	+++	±
地黄	+	+
熟地黄	±	+++

2) 地黄煎とは

「地黄煎」と書かれると地黄を水で煮つめて濃縮した抽出液と思ってしまいます。当初はそうであったらしいですが、12世紀以降は、その液体を水飴に混ぜ込んで練った飴として関西を中心として売られていたようです。今でも地黄煎は漢方薬としても販売されているようですが、一般には「飴」を意味するようです。江戸時代には全国的にも売られていたようで、1661年の加賀藩の資料の中に「地黄煎町」の名前がでていているといえます。金沢市のホームページによると藩政初期、泉野新村で地黄を採取して地黄煎という飴薬を売り出したことから、1821年に正式にその付近を地黄煎町としたそうです。大学時代は付近に竹林があった記憶がおぼろげにありますが、まさか地黄を栽培していたとは知りませんでした(白梅寮という金沢大学の女子寮の近くだったはずですが、金沢大学の寮自体も近々廃止になるとか)。

現在、地黄煎町の名は無くなって今の泉野町から泉が丘にかけての町名の一部地域に相当するようです。私が円光寺から香林坊へ向かうバスの車中から見たバス停が丁度その付近でした。

●**町の呼び方**：余談ですが、大学当時、富山県出身の同級生が当初、町を「ちょう」と読んでビックリした記憶があります。なぜなら金沢では「まち」と読んでいたからです。天神町は「てんじんまち」、桜町は「さくらまち」、上野本町は「うえのほんまち」…彼はこれらを「てんじんちょう」、「さくらちょう」、「うえのほんちょう」と読んでいました。確かに私が富山に移り住むと豊城町(とよしろちょう)、明倫町(めいりんちょう)、高園町(たかぞのちょう)と町を「ちょう」と読むケースが多いとは感じましたが、豊田新町(とよたしんまち)、奥田町(おくだまち)、千石町(せんごくまち)など「まち」と読む場合も結構多いので、何故に彼が「ちょう」にこだわっていたか分かりませんでした。実は彼は富山県立山町(たてやまちょう)の出身で、市町村という行政区域での町(ちょう)に住んでおり、立山町内の各地区は町名ではよばず地区名で呼ばれていますから、町とみると自然に「ちょう」と呼んでしまったのではないかと思われました。どうしてもよい分析でしたが皆さんの周辺の町の呼び方は「まち」ですか「ちょう」ですか？

3) さいごに「煎」の意味

「煎(セン)」の文字は職業柄、漢方薬での「煎じる」という意味でしかとらえていませんでしたが、前述したように水飴で練った飴のようなものも含むようでした。「煎餅(せんべい)」という字にも「煎」の字が使われていますが、煎餅は乾いた硬い食べ物というイメージがありますので、この場合の「煎」は「液状」の意味はなさそうです。

「全訳漢辞海(三省堂)2001年版」で調べてみると、元々の「煎」の意味は「乾かすように火にかける」とあります。そこから①水を用いて煮つめる・せんじつめる、②鍋に少量の油を薄くひき、加熱してから食物を入れてさっと表面を焦がす・炒る、③溶けて消え入る・消滅する、④いらだち憂える、という四つの使い分けをします。「煎じ薬」は①の意味であり、「煎餅」は元々の意味で餅を乾かすように火にかけるという意味になりそうです。

(終わり)